

その日のまえに

2008(平成20)年10月8日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督＝大林宣彦／脚本＝市川森一／原作＝重松清『その日のまえに』（文藝春秋刊）／出演＝南原清隆／永作博美／寛利夫／今井雅之／風間杜夫／勝野雅奈恵／原田夏希／柴田理恵／森田直幸／宝生舞／小日向文世／寺島咲／厚木拓郎（角川映画配給／2008年日本映画／140分）

第3章

意外な設定が興味をひく

……永作博美と南原清隆が難病モノ映画で大熱演！「その日」が1年後と知ったとし子の願いと計画は……？「涙、涙、涙の感動作」たる重松清の原作を、大林宣彦監督が映像美術をフル稼働させてスタイリッシュな映像美に。時間軸をバラバラにした構成は一見わかりにくいですが、2時間20分後には全て明確！なお、宮澤賢治と「永訣の朝」についても、この際お勉強を……。

永作博美、3カ月 vs. 1年

永作博美が宅間孝行と夫婦役で主演したサタケミキオ監督の『同窓会』（08年）は、身体の異変に気づいた雪が医師から「3カ月」と宣告されたことに端を発する面白い映画だった。この映画のテーマは、妊娠3カ月と余命3カ月の「勘違い」……。それに対して、重松清原作の『その日のまえに』は、「涙、涙、涙の感動的な小説」らしい。永作博美扮するとし子が夫日野原健大（南原清隆）の見守る中、主治医の永原医師（風間杜夫）から下されたのは、余命1年という宣告。育ち盛りの長男健哉（大谷耀司）と次男大輔（小杉彩人）を持つ43歳の主婦とし子が、なぜ突然の病で余命1年という事態に……？同じ永作博美がヒロインを演じていても、笑いの渦がまき起こった『同窓会』とは大違いで、『その日のまえに』は、ここで涙、あそこで涙のオンパレード。

私が思うに、とし子の血液型はきっとA型。なぜなら、自分の死を予想してあれだけ周到な準備ができるのはA型人間しかいないはずだから……。それにしても、笑いと涙、人間の強さと弱さを絶妙に演じ分けながら、夫と子供たちに対する愛と信頼を

全然失わない、きっと血液型はA型に違いない女とし子を永作博美が見事に熱演！
これは、ひょっとして日本アカデミー賞の主演女優賞にノミネート……？

こりゃ、ナンチャンの代表作に！

お笑いタレントだからといってお笑いの才能だけではないことは、「世界のキタノ」こと北野武監督や、今や司会業が本職となった島田紳助、見事に画家に転身したジミー大西などを見れば明らか。もっとも、これはほんのひと握りの天才だけのはずだが……。「ウッチャンナンチャン」のナンチャンも、お笑いやバラエティーの他近時ダンスや演技にも本格的な才能を見せていたが、大林宣彦監督のこんな「涙涙の映画」に日野原健大役として抜擢されたのは私には意外。しかし、仕事場を守りかつ子供たちを守りながら、妻とともに懸命に生きていく夫役を好演。永作博美と並んで日本アカデミー賞主演男優賞ノミネートは無理としても、この作品が彼の代表作となることはまちがいない！

とし子の故郷は？

大林監督の生まれは岡山市（「尾道出身」と言われているが、それはまちがいでホントは岡山市内らしい）だが、『転校生』（82年）、『時をかける少女』（83年）、『さびしんぼう』（85年）という「尾道3部作」が有名。

他方、この映画には宮澤賢治の詩集と彼の詩「永訣の朝」の一節が再三登場する。

「けふのうちにとほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ」から始まる「永訣の朝」は、「あめゆじゆとてちてけんじゃ」というフレーズ（これは「あめゆきを取ってきてくれない」という意味）がくり返される、ちょっとわかりにくい詩。このことからわかるように、とし子の故郷は宮澤賢治と同じ岩手県だ。

今ドキの若い人たちは、賢治の「永訣の朝」などきっと知らないだろうから、映画の中で「くらむほん」の宮澤とし子（原田夏希）がチェロを弾きながら切々と歌う「永訣の朝」も馴染みやすいものではない。それは、「その日」を抱えながらも、ひとり息子の川田トシ（森田直幸）に言い出せないでいる母川田孝子（柴田理恵）や、病気の母親とし子を心配する次男の大輔が聴くと感動的だが、ケータイ命、彼氏命の女子高生（寺島咲）には、歌を聴くよりもケータイを取る方が大切なことを見ればよくわかる。しかし、映画の中で何回もくり返し歌われるこの曲は、じっくり聴けば実に

いい曲だ。夫婦の会話を聞いている限りでは、健大が妻の故郷を訪れたことはなく、それは2人の子供たちが成長した後の楽しみにしていたようだが、きっと今の2人の目には、雪で真っ白になっている故郷を2人で一緒に歩く姿が見えているはず……。

華麗でポップな映像美をじっくりと！

大林作品である『22才の別れ Lycoris 葉見ず花見ず物語』（06年）は、私の採点ではまずまずの星3つだった（『シネマルーム15』402頁参照）が、蓮佛美沙子が快演を見せつけたリメイクではない『転校生—さよなら あなた—』（07年）は、星5つの面白い映画だった（『シネマルーム15』350頁参照）。また、『転校生—さよなら あなた—』で際立っていたのが、大林監督の持ち味である華麗でポップな映像美だが、それが『その日のまえに』でも随所に。映画とは便利な芸術で、編集（ポストプロダクション）によって時系列を1度ハチャメチャにしたうえで、あの話この話をあちこちにちりばめることができるが、大林監督はこの映画でそんなテクニックを縦横無尽に駆使している。すなわち、この映画は余命1年の告知を受けた健大・とし子夫婦が共に生きていく今の姿がストーリーの核だが、そこには①2人が浜風で過ごした新婚時代の物語と、②本来健大・とし子夫婦とは何の関わりもない、佐藤俊治（寛利夫）と石川剛史（今井雅之）の2人を中心とした今と昔の物語が絡んでくるから、結構話はややこしい。しかし、そこを映像のテクニックでうまくまとめるのが編集の腕。大林監督が「70代の新人」という心意気で取り組んだこの映画で見せるそんな、ガラガラボンの腕前をじっくり味わいたいものだ。

「その日のまえに」出逢う人たち その1—浜風にて—

私たち団塊世代のおじさんが次第に涙もろくなり、時として感傷的になるのは加齢に伴う必然的現象だが、43歳のとし子も「あと1年」の宣告を受けた後、少し感傷的になったようだ。その結果、強引に永原医師の許可を取って実現したのが、健大と新婚時代を過ごした思い出の地の散策。そんな感傷にひたってどうするの、と思えなくてもないが、「浜風駅」に降り立ったとし子はいかにも嬉しそう。大林監督は映画前半の多くの時間を、映像技術をフル動員しながら、この懐かしい町の散策に喜々として臨むとし子とそれを温かく見守る健大の姿を描いていく。そこで2人が出会うのは、「浜風マーケット」の面々や喫茶店「朝日のあたる店」に集う客たちだが、そこには



© 2008『その日のまえに』製作委員会

いっばいの思い出が。ちなみに、夫富永（小日向文世）からのドメスティック・バイオレンスに苦しむ妻入江睦美（宝生舞）との新しい出会い（ハプニング）では、とし子は思いがけない武勇伝を……。面白いのは、とし子と健大が「浜風駅」に向かう列車の中で出会い、同じ「浜風駅」で下車してきた、いわくありげな男佐藤俊治をここで登場させたこと。少し前に示される「かもめハウス」のおばば（根岸季衣）や荒海に向かって泣き叫ぶオカちゃんの母（吉行由実）のシーンとこの佐藤俊治が、映画後半の花火大会の物語への伏線となるのだが、そこらあたりの演出はさすが。

🎬 「その日のまえに」 出逢う人たち その2—花火大会にて—

東京と地方の格差の拡大の1つの象徴が、地方都市における旧商店街の「シャッター通り化」だが、それは2人が新婚生活を過ごした浜風の商店街も同じだったよう。佐藤が「浜風駅」に降り立ったのは、ガキの頃の親友で今は石川薬局を営む石川剛史を訪れるため。そして「その日」を迎えようとしている佐藤が、ガキの頃にオカちゃんとの間で果たせなかったある約束を果たすため。

懐かしいガキの時代の思い出話が石川と佐藤の間で語られるが、そこで石川が思い

ついたのが、パーッと派手に花火大会を開催することによって、あの人この人をあの世から呼び戻そうという企画。活力を失った商店街を活性化させるためのイベントは各地で開催されているが、石川の企画もその1つだ。そして、その宣伝チラシのためのイラストを、今や大成功しているイラストレーターの健大に依頼したわけだが、花火大会の場所が浜風と聞いて健大がその企画に乗ったのは当然。

健大が描いた花火のイラストは、子供が描いた素朴な絵そっくりの単純なものだが、花火大会の日、健哉と大輔と共に浜風を訪れた健大は、あの世に行ってしまったとし子と再びそこで出会うことができるのだろうか？

3カ月後に届くとし子からの手紙は？

『手紙』というタイトルの映画が2つある。1つは東野圭吾の原作を生野慈朗監督が映画化した、山田孝之と玉山鉄二が兄弟役で主演した『手紙』(06年)。もう1つは、1997年の韓国ナンバーワンヒット作で「これぞ韓流！」という涙いっぱいのラブストーリーの名作。前者は、殺人犯として刑務所に入った兄と弟が交わす手紙がポイントで、その出来はまずまず(私の採点は星3つ『シネマルーム12』207頁参照)。後者は、先日自殺したことが報じられた韓国の美人女優チェ・ジンシル演ずるジョンインが病気で死亡したはずの夫ファニユからの手紙が一定の期間をあけて次々と届くという面白い設定で、私の採点は星5つ(『シネマルーム19』132頁参照)。『その日のまえに』には、それとよく似た仕掛けがある。といっても、その手紙は「3カ月後に奥様から渡してくれといわれていました」という山本看護師(勝野雅奈恵)が健大に手渡してくれたものだ。彼女の話によれば、手紙好きの(?)とし子は自分が死んだ後に夫に渡す手紙を何度も何度も書き直していたとのこと。もちろん山本看護師は今健大に手渡している手紙の内容を知らないが、さてそこには何が書かれていたのだろうか？ネタバレご免であえて書けば、多分それは世界で一番短い、たった1行だけの手紙。そこには、「忘れてもいいよ」の1行が……。

鑑賞前には必ずハンカチを

「難病モノ」の泣かせる映画はたくさんあるが、これもその1つ。原作のことを少しでも知っている人は、ハンカチが必要とわかっているはずだが、予備知識ゼロで映画館に向かう人は必ず鑑賞前にハンカチの準備を……。2008(平成20)年10月9日記